

## 『思索の示唆』に見るナイチンゲールの -ism の世界

広島文化学園大学看護学研究科特任教授  
佐々木 秀美

### はじめに

1860年にフローレンス・ナイチンゲール (Florence Nightingale 1820-1910) が著した『Suggestions for Thought』<sup>1)</sup> は、全三巻に及ぶ膨大な内容の論文であり、キリスト教主義 (Christianity) らしく宗教的信条を強く打ち出しながら、哲学的要素を多く含んだものである。伝記作家で批評家でもあるリットン・ストレイチー (Lytton Strachey 1880-1932) に酷評された本著は『思索の示唆』<sup>2)</sup> としてわが国でも翻訳・出版されている。ストレイチーは「彼女の形而上学的探求は、枝葉を広げて一般論を展開すると思うと、突然思いがけない方向変換する。」<sup>3)</sup> と述べ、心底からの怒りに震える彼女のペンは、過激な文章で神の本質について述べている。ストレイチーの言う形而上学 (metaphysics) とは、感覚ないし経験を超えた世界を真実とし、その世界の普遍的な原理について理性的な思惟を言う。言うなれば『思索の示唆』は、ナイチンゲール自身が日常生活において体験した現象を、自然界との関係において神や人間の本質について探ろうとしたものである。よって、その内容は、極めて内省的 (Introspective) ・霊性 (Spirituality) 的であり、彼女の“-ism”の世界を垣間見ることができる。

一般的に“-ism”とは“～主義”の事であり、ある特定の人物、団体や政府の主張や行動の指針に関する原則 (principle) や思想 (thought) の事を言う。それは、自己を知るという内省・内観が含まれる。内観 (introspection) というのは、内省と同義語であり、自分で自分の気持ちや考えを自己の内側に視点を当ててよく観ることであり、内省・内観によって人は己を知り、成長・進歩する。ナイチンゲールは、「自己を知れ」<sup>4)</sup> という言葉がある伝道者の言葉として引用し、自己を知ることによって神の内に自分を見ることができると、キリスト教的側面から述べている。汝自身を知れ (Know thyself) という言葉は、ギリシャのデルポイのアポロン神殿入口に刻まれた古代ギリシャの格言であり、ギリシャの高名な哲学者、ソクラテス (Socrates 紀元前469-399) の言葉であるとされる。

考えてみるとナイチンゲールにとって、その行動の指針となったのは何か？彼女の90年という長い人生の中で辿り着いたものは何であったのか？彼女のいくつかの生涯史<sup>5), 6), 7), 8)</sup> や著作に見る限り、それは恐らくキリスト教主義的信条を基本としながら、その生育過程において自身が経験した内的感情と、彼女自身が望んだ理想的な生活追及の過程の中にあっただのではないかと考えられる。人生の前半は幼きながらも神の啓示を受け、当時の人道主義 (Humanitarianism) 的・博愛主義 (Philanthropy) 運動の中で、弱者憐みの心が生じてくる段階であり、母親と共に病者を見舞うと同時に、当時の貧困・無知・病気との関係について認識する段階に至る。そして自身が看護師になりたいと熱望した時の家族の反対と対する反抗、その間の精神的危機状況の中で、神の存在について感知する心霊的・神秘主義

連絡先：佐々木 秀美  
〒737-0004 広島県呉市阿賀南2-10-3  
E-mail: hidemi@hbg.ac.jp

(Mysticism) 的段階へと進む。そうした過程において自身の夢や希望が明らかになって精神を統合させる段階に至る。

ナイチンゲールが生きたヴィクトリア女王治世下の19世紀は、チャールズ・ダーウィン (Charles Darwin 1809-1882) の進化論に代表されるように、科学黄金時代の幕開けの時代でもあった。ダーウィンの継承者達をダーウィニズム (Darwinism) と呼ぶが、その代表者にハーバート・スペンサー (Herbert Spencer 1820-1903) がいる。ヴィクトリア朝中期の科学者である彼の思想は、『科学の起源』<sup>9)</sup>、『進歩について—その法則と原因』<sup>10)</sup>、『知識の価値—教育論第一部』<sup>11)</sup>などに明確である。スペンサーは目的論的に言えば自然が健康のために有効な安全装置を与えてくれたのに、知識不足がこの安全装置の大半を無駄にしていると述べ、たくましい体力とそれに伴う元気とは、幸福の最大の要素であるから、その保ち方の教育こそ他の一切に勝る重要な教育となろう<sup>12)</sup>と述べている。その上で、スペンサーは生理学の一般真理と、日常行為との関係を理解するに必要な生理学のコースこそ、合理的教育の最も基礎的な部分であると述べた。日常生活と生理学、それこそがナイチンゲールが後に看護教育で示した教育内容であり、『看護覚え書』<sup>13)</sup>も、人々の健康に関連する普遍的な原則について論じたものである。ゆえに科学も又、現象を原因と結果の関係において真理の探究である。それは、認識から行動への過程が含まれ、プラグマティズム (Pragmatism) 的・科学主義 (Scientism) 的要素も多く含まれた。

ところで筆者の手元にある英語版の『Suggestions for Thought』は、VOLUME One の part I が「believe in god」<sup>14)</sup>、と part VI の「Law」<sup>15)</sup>、次に VOLUME TWO の part II ~ VIII迄、そして「casandra」<sup>16)</sup>で編集されている。わが国で翻訳・出版されている『思索の示唆』は第一巻の第一章「神を信じること」、第二章「信仰、内なる心を含む信仰」、第二巻の補償「カサンドラ」のみで構成され、いずれにおいても欠落しているところがある。しかしながら、欠落している部分があっても、『Suggestions for Thought』は、ナイチンゲールの行動の指針となっている原則や思想を紐解く手掛かりになると考えられる。そこで、本論では、翻訳本の『思索の示唆』を手掛かりに、『Suggestions for Thought』に登場させた多彩な人物たちを手掛かりにしながら、彼女の認識する神や人間の本质探求を日常生活との関わりにおいて筆者也の能力の及ぶ範囲内で検証していくこととする。尚、ナイチンゲールが挙げる人物及びその思想については『哲学辞典』<sup>17)</sup>、『世界人名辞典』<sup>18)</sup>、『聖書』<sup>19)</sup>、『広辞苑』<sup>20)</sup>、『Wikipedia』、あるいは関係する著作等や文献等を参考にした。

## I. 思索への示唆に見るナイチンゲールの真理探究

### 1. 真理の探究者達よ

ここでの命題は、人間に自分の能力を働かせる可能性を持たせ、その能力によって真理を求めてきた人間の成長の中で、何が本当に真理であるかをつかむことができるようにし、神の本质、人間の本质と未来の姿を理解し、その未来像を実際に追求していく方法を判断できるようにすることである。『Suggestions for Thought』の冒頭は、「Fellow-Searchers 真理探究者である友よ！」<sup>21)</sup>との呼びかけに始まる。彼女は、人々が神に望むところは真理であるとして、「神の真理とは何かについて判断できるようになるためにこそ、各人がもてる力を鍛えかつ教育されなければならない。」<sup>22)</sup>と述べ、「人間の教育は、人間を作り替えることを目的として与えられるべきである。」<sup>23)</sup>と述べる。しかしながら、ナイチンゲールは言う。畏るべき主題である宗教が権威もなく放置されているとはなんと絶望的な事か。つまり、イギリスの宗教改革と、様々な宗教の乱立、そしてそれに伴う国民の宗教への無関心さと道徳的退廃、そのことをナイチンゲールが認識したことが『思索の示唆』執筆に至った動機であると考えられる。

ナイチンゲールが認識した当時の宗教的・道徳的退廃は、国家の問題であり、それは『ナイチンゲールの宗教観に関する若干の考察—友人アーサー・ヒュー・クラフとの関わりをてがかりに— (その1)』<sup>24)</sup>及び『ナイチンゲールの宗教観に関する若干の考察—友人アーサー・ヒュー・クラフとの関わりをてがかりに— (その2)』<sup>25)</sup>でも検証・検討した課題である。ナイチンゲールは我々が神を真摯に求めるならば、真理の精神 (the Spirit of Truth) こそが我々の権威であり、信仰の統一への唯一の道は、その本質を真に深めていくこと、そしてそれを実践する真の生活にあると考えた。その上でナイチンゲール

ルは、モーゼとパウロが荒野から来て言った「これこれらは奇しくも真理と掲示された。世界はこれを感じなければならない」<sup>26)</sup> という言葉を提示しながら、「人は人間の本質の内在的・外在的資質でもって、すべての真理をそれ相応に発見していくのである」<sup>27)</sup> と述べる。その上で彼女はカサンドラ、神を信じること、信仰・内なる心を含む信仰の三部に分けて真理探究者に呼びかけ、多彩な人物を登場させて論を展開する。

ナイチンゲールの述べるモーゼ（Moses 紀元前16世紀又は13世紀頃）は、旧約聖書に出てくる預言者である。シナイ山でモーゼは神から十戒を受けたとされる。“汝姦淫するなかれ”“汝盗むなかれ”“汝偽証するなかれ”等、十の戒めがモーゼの十戒と言われる教えである。旧約聖書の記述によれば、モーゼが生まれた当時、ヘブライ人が増えすぎること懸念したエジプトのファラオ（Pharaoh 王のこと）は、ヘブライ人の男児を殺すよう命令した。出生を隠し切れなかった一人の母親は、息子をパピルスのかごに乗せてナイル川に流した。ナイル川でたまたま水浴びしていたファラオの王女が上流から流れてきた幼子を拾い、水から引き上げたので、引き上げるの意味にちなんでモーゼと名づけて育てた。長じてモーゼは、虐げられているヘブライ人たちと共にエジプトからシナイ山に向けて出発、民と共に苦しい荒野の旅を続ける。旅の途中、人々は水や食べ物のごとくしばしばモーゼに不平を言い、そのたびにモーゼは、水や食べ物を与えて神の力を示した。やがて人々がシナイ山に近づくと、モーゼは山に登って十戒を受けた。パスカルによれば「モーゼは最初から三位一体、原罪、メシアの教えを説いた。」<sup>28)</sup> と述べる。メシアとはユダヤの思想で、この世にあらわれて人々をすくう指導者・救世主の事であり、ここではイエス・キリスト（Jesus Christ）を指す。三位一体とは父（神）と子（キリスト）と聖霊が本質的には一体であるとの説を言う。原罪とは旧約聖書の創世期で創られた人間アダムとイブが神にそむいて犯した罪の事である。特にアダムを誘惑して禁断のリンゴを食べさせたイブを性悪とし、そのイブから生まれた子供たちは本来罪をもって生まれるというキリスト教の“性悪説（bad nature）”につながる。つまり、モーゼは神の子であるキリストが人間の罪を贖罪するためにこの世にあらわれることを預言したのである。

他方のパウロ（Paulo 不詳-60年頃）は、初期キリスト教の使徒であり、新約聖書の著者の一人である。『聖書』<sup>29)</sup> によれば、はじめ彼はサウロと呼ばれ、ローマ帝国支配下のユダヤにおける最高裁判権を持った宗教的・政治的自治組織のサンヘドリン（Sanhedrin）と共にイエスの信徒を迫害していた。ところが、サウロがダマスコに着いた時、突然、天からの光が彼の周りを照らした。サウロは地に倒れ「サウル、サウル、なぜ、私を迫害するのか」<sup>30)</sup> と呼びかける声を聴いた。サウロが「主よ、あなたはどなたですか」と尋ねると「私は、あなたが迫害しているイエスである。起きて町に入れ、そうすればあなたの為すべきことは知らされる。」<sup>31)</sup> との声と同時に目が見えなくなった。サウロは、ダマスコの町でアナニアという人物にあった。彼がサウロの頭に手を置いて、「あなたがここへ来る途中に現れてくださった主イエスは、あなたの目が見えるようになり、又、聖霊で満たされるようにと私をお遣わしになったのです。」<sup>32)</sup> と言った。すると突然、目からうろこのようなものが落ち、目が見えるようになった。回心したサウロは、ダマスコで福音を告げ、エルサレムで使徒たちに会い、パウロと呼ばれるようになり、ヘレニズム世界に宣教活動をするようになった。パウロは、ユダヤ人で初期キリスト教の使徒であり、新約聖書の著者の一人である。イエスの死後に信仰の道に入ってきたためイエスの直弟子ではなく、“最後の晩餐”に連なった十二使徒の中には数えられない<sup>33)</sup>。つまり、モーゼとパウロの両者は神に選ばれて預言者や伝道者になったのである。真理はまさに一つであると述べたナイチンゲールは、真理であると信じる者を提示するとして、本著作に多彩な人物を登場させた上で、あなた方自身で判断して欲しいという。

## 2. 神を信じること

ここでの命題は、神を信じるか否かである。彼女は、「信じるとは権威のために与えられた信用である」<sup>34)</sup> と言ったジョンソン博士の言葉を引用して、権威の意味する言葉の意味を他に探し求めようとする。それではどういう意味で我々は神を信じるのか？ナイチンゲールの答えは、不確実性が人間を宗教へと進ませると述べる。つまり、神を信じることは宗教（religion）である。一般に、宗教とは人間の力や自然の力を超えた存在への信仰を主体とする思想体系であり、神または何らかの超越的絶対者あるい

は神聖なものに関する信仰・行事などを指す。

ナイチンゲールは、「ジョンソンは、宗教を神への畏敬と将来の報酬と罰への期待に基づいた美德と定義したが、宗教という言葉の意味についてミルトン、サウス、ワッツ、ローはジョンソン博士の言葉を引用して説明している。」<sup>35)</sup>と述べる。つまりは、ジョンソン博士の言葉を引用すれば、誰しもが宗教の意味について納得するとのことである。ナイチンゲールが述べるジョンソンは、サミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson 1709-1784) の事である。彼は、イギリスの文学者 (詩人、批評家、文献学者) であり、18世紀イギリスにおいて“文壇の大御所”と呼ばれた。少年期に患った結核によって、片耳が聞こえず、片目は見え、頸には瘰癧 (king's evil) があつた。最初、オックスフォード大学で学ぶが、家が貧しかったため中退し、故郷に戻り教員になった。1735年、20歳年上で未亡人のエリザベス・ポーター (Elizabeth Porter 1689-1752) と結婚した。エリザベスの最初の夫は、(Henry Porter 1691-1734) という。ジョンソンとの結婚によりエリザベス・ジョンソン (Elizabeth Johnson) となった。1737年、ロンドンに出て、悲劇を書いたり、新聞へ寄稿したりした。1746年に『英語辞典』、1755年に『英語辞典』2巻を完成させた。この業績によりオックスフォード大学より文学修士が与えられた。『ジョンソン博士の言葉』<sup>36)</sup>の原著者は、法律家で伝記作家のジェイムズ・ボズウェル (James Boswell 1740-1795) である。彼のジョンソン語録は、ジョンソンの言葉よりも強くジョンソン博士をイギリス国民の最も身近な人物にした<sup>37)</sup>と評される。つまり、人々は、ジョンソン博士の言葉を引用して宗教について論じれば誰もが納得するという事態が起きたようである。

ここで名指しされたジョン・ミルトン (John Milton 1608-1674) は、イギリスの詩人で共和派の運動家である。彼は、イギリスの政治家であり軍人でもあるオリバー・クロムウェル (Oliver Cromwell 1599-1658) を支持した。クロムウェルは、清教徒革命 (イギリス内戦) の時期に当たる1649年から1660年までの間、イギリス王国 (ウェールズを含む) と、後にはアイルランド王国・スコットランド王国を支配した共和制の政治体制を推進した人物である。ミルトンは、ケンブリッジ大学クライストカレッジに入学し、1629年に学士号、1632年に修士号を取得した。1644年に教会改革論や言論の自由を論じ、他代表作に『失樂園』がある。

ロバート・サウス (Robert South 1634-1716) は、闘争的な説教とラテン語の詩で知られるイギリスの聖職者である。ウェストミンスタースクールの校長、リチャード・バスビー (Richard Busby 1606-1695) の教育を受け、1651年にオックスフォードのクライストチャーチに入学した。校長のバスビーはイギリス国教会の司祭でもあつた。1657年にキリスト教会の首席司祭で副総長だつたジョン・オウエン (John Owen 1616-1683) は、サウスが共通の祈りの書 (The Book of Common Prayer BCP) を使用したために、彼が進めていた修士号 (MA (Master of Arts)) に反対した。BCPは、イギリス国教会聖公会や、イギリス国教会に関連する他のキリスト教会で使用されている祈りの本に付けられた歴史的な名前である。1549年に出版された元本は、ローマとの決別後のイギリス宗教改革の産物であつた。それは、毎日の礼拝と日曜日の礼拝の為の祈祷書である。オウエンは、イギリスの非国教徒の教会指導者、神学者、オックスフォード大学の学術管理者であつた。この後、サウスは1659年にケンブリッジで修士号 (MA) を取得した。ジェイムズ2世 (James VII and II 1633-1701) の治世に、当時アイルランド総督であつたローレンス・ハイド (初代ロチェスター伯爵 Laurence Hyde 1641-1711) は、ジェームズ2世の支持者であつたが、1688年に行われた名誉革命 (Glorious Revolution) を支持した。ロチェスターは南部にアイルランド大司教区を提供し、1686年にサウスをイギリス国教会の神学者の1人として指名した。1693年、サウスはソツツイーニ派 (The Socinian controversy) の論争に匿名で介入、イギリスの教会指導者ウィリアム・シャーロック (William Sherlock 1639-1707) に対して強い敵意を持って介入し、シャーロックの著述を贖罪の教義に関する異端として激しく攻撃、彼の三位一体論は、三神論的であると主張した。

アイザック・ワッツ (Isaac Watts 1674-1748) は、イギリスの会衆派牧師、賛美歌作家、神学者、論理学者である。会衆派 (Congregationalist) とは、イギリス、アメリカを中心として発足したプロテスタント諸教派の組合的一派で、原始教会に帰ることを理想とし、信仰をもった個人が自発的に形成する団体を教会とみなして、各教会の独立性、自律性を尊重した会派の事を言う。ワッツは多作で人気のある賛美歌作家であり、イギリスの賛美歌のゴッドファーザーとして認められている。彼の賛美歌の多く

は今日でも使用されており、多くの言語に翻訳された。ワッツは非国教徒であり、オックスフォード大学やケンブリッジ大学に通うことができなかった。これらの大学は当時の政府の役職と同様にイギリス国教会に限定されていたからである。そこで、彼は1690年にストーク ニューイントンのアカデミー (the Dissenting Academy) で教育を受けた。教育修了後にワッツは、ロンドンの大規模な独立礼拝堂であるマーク レーン コングリゲーションナル チャペル (Mark Lane Congregational Chapel) の牧師となり、体調不良にもかかわらず説教者の訓練を手伝った。彼は、特定の宗派のために説教するよりも、教育と学問を促進することに大きな関心を持っていた<sup>38)</sup>。ワッツは、一般的な非国教徒の会衆主義者よりも、より非宗派的またはエキュメニカル (Ecumenical) な宗教的意見を持っていた。エキュメニカルとは、エキュメニズム (Ecumenism) と呼ばれ、異なるキリスト教の宗派に属するキリスト教徒が協力して教会間のより緊密な関係を築き、キリスト教の団結を促進するという概念と原則である。

ウィリアム・ロー (William Law 1686-1761) は、1705年、ケンブリッジのエマニュエル・カレッジにシザール (Sizar) として入学し、古典、ヘブライ語、哲学、数学を学んだ。シザールとは、在学中に食事、学費の減額、宿泊などの何らかの形で援助を受ける学部生のことであり、場合によってはその見返りとして、決められた仕事等をする役割を持つ。1711年には大学のフェローに選ばれ、叙階された。彼はケンブリッジに住み、1714年にジョージ1世 (George I 1660-1727) が即位するまで教職に就き、時折義務を果たした。彼は、イギリス国教会の司祭ではあったが、イギリス国王のジョージ1世に忠誠の誓いを立てることができなかったため、ケンブリッジのエマニュエル大学での地位を失った。ローは、ジャコビニズム (Jacobinism) と呼ばれるスチュアート家 (The House of Stuart) の上級家系を、イギリス王位に復帰させることを支持した政治運動の一員であった。スチュアート家は、スコットランド、イギリス、アイルランド、そして後にイギリスの王家である。スチュアート家の最初の君主はロバート2世 (Robert II 1316-1390) で、その男系の子孫は1371年からスコットランドで、1603年から1714年までイギリスとイギリスの王と女王であった。1714年にスチュアート家のアン女王 (Anne Stuart 1665-1714) が亡くなると王冠は、1701年の和解法と1704年の治安法に基づいてハノーバー家に渡された。王位を失った後、ジェームズ7世と2世の子孫はジャコバイトとして知られるようになり、19世紀初頭以来、正当な相続人としてスコットランドとイギリスの王位を取り戻す運動を数世代にわたって続けた。という訳で彼はフェローシップを剥奪されたのである。その後数年間、ローはロンドンでキュレート (Curate) を務めた。キュレートとは必要な情報を収集して分析したり、公開したりすることである。1727年までに、彼はパトニーで実業家のエドワード・ギボン (Edward Gibbon 1666-1736) の息子で同名、後に政治家になったエドワード・ギボン (Edward Gibbon 1707-1770) の家庭教師として一緒に暮らした。ローの神秘的で神学的な著作は、彼の誠実さを示しており、当時の福音主義運動や、ジョンソン博士や同名の祖父や父を持つ歴史家のエドワード・ギボン (Edward Gibbon 1737-1794) などの啓蒙思想家に大きな影響を与えた。ここで紹介された以上の4人は、聖職者であるが、時の政治的背景の中で異なった思想を持った。

ナイチンゲールは言う。「人はその人間性が良い素質を持ち、よく教育され、よく働かせているかに正確に比例して、完全なるもの (人はこれを神とよんでも良い) が存在していることを意識し確信するようになる。人間性は、このように (良く生まれよく育まれれば)、この真理及びそれから推論される他の真理も、ちょうど目の前の樹は一本の木であって家ではないと断言するときのように、力強くかつ完全に、その意味を受け入れるであろう。」<sup>39)</sup> ところが、良く教育を受け道徳的で知的な人々は、例外なく無神論者か有神論者であっても礼拝の場へは行かない人たちである。「これらの人たちは、一生懸命にしかも誠実に考えながら、彼らが求めている糧の最善の要素を考えていない。混乱に秩序を与え、最低のものを最高のものへと変える最も神聖な要素を忘れていて。なぜならば存在において見出しうる最高の原理とは、おそく幸福を志向する健全な唯一者に帰属する感情である。完全な唯一者の意図、即ち幸福は、その本質からいって幸福な人々自身の本性及び同じような他人の本性とを働かせることによって作り出されたものである。」<sup>40)</sup> とナイチンゲールは考える。その代表的な人物としてデカルト、ラプラス、ヒュームを挙げる。「人類の最も教養人とされるデカルト、ラプラス、ヒュームらが神を全く認め得なかったことは本当である、」<sup>41)</sup> と述べたナイチンゲールは、彼らが最も高い教養人であったのか疑問を投げかけ

る。

ナイチンゲールが、最初に述べたルネ・デカルト (René Descartes 1596-1650) は、フランスの哲学者、数学者である。彼の“我思う、ゆえに我あり”という言葉は有名であり、“近代哲学の父”と称される。彼はスコラ哲学 (scholasticism) における信仰による真理の獲得ではなく、人間の持つ理性を用いて真理を探求していこうとする立場を取った。

ラプラスとは恐らく、ピエール＝シモン・ラプラス (Pierre-Simon Laplace 1749-1827) の事であろう。彼はフランスの数学者・物理学者・天文学者であり、ラプラス変換の数学的な基盤を作り、ラプラス方程式という偏微分方程式を考察した。彼の“天体力学概論 (traité intitulé Mécanique Céleste) は有名である。ラプラスは、自然界は厳密な因果法則によって構成されており、その基本はサー・アイザック・ニュートン (Sir Isaac Newton 1642-1727) の力学的運動であると考え、ラプラスの魔 (Laplace's demon) の概念によって哲学的に重要な示唆を得た。ラプラスの魔とは、主に近世・近代の物理学分野で、因果律に基づいて未来の決定性を論じる時に仮想された超越的存在の概念であり、ある時点において作用している全ての力学的・物理的な状態を完全に把握・解析する能力を持つ。ラプラスの持つ世界観は、あらゆる事象が原因と結果の因果律で結ばれるなら、現時点の出来事 (原因) に基づいて未来 (結果) もまた確定的に決定されるという“因果的決定論”とでも言うべきものである。起きている現象を結果と見るならば、その原因を探る因果関係を明確にするあらゆる手法は科学的であり、探求の基本である。又、ラプラスは1799年、ナポレオン・ボナパルト (Napoléon Bonaparte 1769-1821) の統領政府で1ヵ月余と短期間ながら元老院議員となり、内務大臣に登用され、王政復古後はルイ18世の下で貴族院議員となった。

デイヴィッド・ヒューム (David Hume 1711-1776) は、スコットランドの哲学者である。ヒュームはイギリス哲学の軸となった経験論者のジョン・ロック (John Locke 1632-1704) などを継承した代表的な人物である。『人間本性論』で彼は、人はどのように世界を認識しているかという認識論より検討を始め、人間の知覚 (perception) を、印象 (impression) と、そこから作り出される観念 (idea) の二種類に分けている。印象と観念には、それぞれ単純 (simple) なものと複合 (complex) なものがあり、全ての観念は印象から生まれると主張した<sup>42)</sup>。そして印象は観念の源泉となるが、観念から印象は生じないとした。

以上の3名が良く教育を受け道徳的で知的な人々ではあるが、神を信じなかったとする。他方でナイチンゲールは、以下に説明するヴォルテールやギボンについて無邪気な子供の方がより真理に近い神の概念を持っていると更に酷評する。

神の概念について無邪気な子供より劣ると評されたヴォルテール (Voltaire) の本名は、フランソワ＝マリー・アルエ (François-Marie Arouet 1694-1778) であり、フランスの哲学者、文学者、歴史家である。歴史的には、先述したイギリスの哲学者のロックなどと共に啓蒙主義を代表する人物とされる。ヴォルテールの思想は啓蒙思想の典型である。彼は、人間の理性を信頼し、自由を信奉した。ヴォルテールの活動として最も有名なものは、腐敗していた教会、キリスト教の悪弊を弾劾し是正することであった。彼はその人生において多くの時間と精力を注ぎ、理神論 (deism) の立場から教会を批判する。理神論とは、神の存在を啓示によらず合理的に説明しようとする立場である。この宇宙の創造主としての神の存在は認めるが、聖書などに伝えられるような人格的存在だとは認めないとする立場である。

もう一人のギボンは、恐らく先述した同名の祖父 (会社経営) と父親 (イギリスの政治家) を持つ、更に同名のエドワード・ギボン (Edward Gibbon 1737-1794) の事であろう。彼は、イギリスの歴史家である。経済的に豊かであったギボンはオックスフォード大学に入学した。在学中彼は、神学の探究の果てにカトリックに改宗した。ところが、その頃のオックスフォード大学では宗教論争が激しく、イギリスで紳士階級の人間がカトリックへ改宗するというのは18世紀の当時、人生においてとてつもない意味を持っていた。紳士階級社会の多くからは排斥されるであろうし、また昇進が望めるような門は閉ざされる。それ故カトリック信者になると立身出世の道が無くなると心配した父親は、ギボンを退学させ、スイスのローザンヌに送った。ここでギボンは、プロテスタントに再改宗した。宗教遍歴の結果、ギボンは宗教を冷めた目で見つめられるようになった。

確かにデカルト、ラプラス、ヒューム等の見解には宗教的要素はなく、自然界の現象を観察することによって正しく認識しようとする科学主義的哲学者であり、ヴォルテールやギボンに宗教を冷めた目で見ていたという特性がある。彼らについてナイチンゲールは「知的にそうであっただけである。」<sup>43)</sup>と云う。彼女は「人間の道徳的、知的、精神的能力が高度に啓発されればされるだけ神についての真の概念にますます近づく。」<sup>44)</sup>と考えたが、「理性と感性と良心のうちでは、真に啓発感性が最も真なる神概念を与えるものである。」<sup>45)</sup>と考えた。私は信じるとは何を意味するのか？ナイチンゲールはこの言葉の意味はある意味で確実性を意味し、あるところでは不確実性を意味していると述べる。われわれの様々な能力で認識可能な、存在しているものおよび存在してきたものを観察し熟考したとき、一種の慈悲深い意志、懸命な意志、力強い意志のしるしを認めないわけにはいかない<sup>46)</sup>。

その前提に立ってナイチンゲールは、ニューマンは、感覚が外界を知るように神を感知し理解する（魂）とか直感が特別に備わっており、その能力とは知性であるといい、マルチノーは人間の道徳性を見て人間は宗教に頼らなくても良心に訴えることを示していると述べる。ナイチンゲールは、彼らが知性という一つの能力で神を発見することができたのか不思議がる。その上で、彼女は「我々が人間を正当に評価し、正しい関係を維持しようとするれば我々の全能力が必要である。」<sup>47)</sup>と述べ、私たちが全能力を働かせないかぎり、人類の中で正しく生活を営むことはできないと考えた。

ニューマンとは、ジョン・ヘンリー・ニューマン (John Henry Newman 1801-1890) の事であり、筆者らの『ナイチンゲールの宗教観—神秘主義の影響とアーサー・ヒュー・クラフとのかかわりを手がかりに』<sup>48)</sup>で詩人のアーサー・ヒュー・クラフ (Arthur Hugh Clough 1819-1861) との関わりを通して検証した人物である。トマス・アーノルド (Thomas Arnold 1795-1842) のラグビー校における改革、すなわち、クリスチャン・ジェントルとしての宗教的要素を強化した道徳教育を受けたクラフが、オックスフォード大学入学後に経験したニューマンの衝撃的な論争やカトリック主義 (Catholicism) 的なオックスフォード改革運動は、クラフの宗教精神を混乱させ、信仰を見失わせ、精神的に不安定な状態にさせ、人生の目的をも見失わせた。そして、「キリスト教が復活して人間に影響力を持ち続けていることに対する否定色の強い懐疑、神が存在しない場合に人が陥る倫理の欠如と既存価値観の良き部分の崩壊に対する憂慮」<sup>49)</sup>という倫理喪失の問題にも発展し、物質的快楽主義 (Material Hedonism) へと世の中が推移して倫理の崩壊が起こるといえるものである。

又、ジェームズ・マルティノー (James Martineau 1805-1900) は、ユニテリアン主義 (Unitarianism) のイギリスの宗教哲学者である。1827年にマンチェスター大学を卒業した後、ダブリンのユニテリアン教会に叙階された。その後、彼は45年間、イギリスのユニテリアン主義の主要なトレーニング カレッジであるマンチェスター ニュー カレッジ (現在のオックスフォード大学のハリス マンチェスター カレッジ) で、精神のおよび道徳的哲学と政治経済学の教授を務めた。ユニテリアン主義とは、キリスト教正統派教義の中心である三位一体 (父と子と聖霊) の教理を否定し、神の唯一性を強調する主義の総称をいう。ユニテリアンはイエス・キリストを宗教指導者としては認めつつも、神としての超越性は否定する。この宗教思想が流入してきたイギリスで彼らは、自由思想家や非国教徒として位置付けられ、また合理主義 (Rationalism) やヒューマニズム (Humanism) の思想を発展させたとも言われている。人生初期の段階でマルティノーは、神が人類の中に現れると信じていた。人は神格化を経験し、すべての生命は、その源に負っている尊厳と恵みに触れた。そしてベルリンのフンボルト大学で第二の教育を受けた期間に、彼はどのように“新たな知的誕生”を経験したか。しかし、それは彼を以前ほど有神論者ではなく、ユニテリアン主義の中で重要な流れとなった超越主義 (Transcendentalism) 的見解を発展させた。超越主義は、イマヌエル・スウェーデンボルグ (Emanuel Swedenborg 1688-1772) に代表され、1820年代後半から1830年代にかけてイギリスで発展した哲学運動である。核となる信念は、人と自然に本来備わっている良さであり、社会とその制度が個人の純粋さを墮落させている一方で、真に自立したときに人は独立した最高の状態にある。超越主義者は、遠い天国を信じるのではなく、日常に内在する神聖な経験を見る。そして、彼らは物理的および精神的な現象を、個別の実体ではなく動的プロセスの一部と見なした。ナイチンゲールは彼らを引き合いにしながら、「人間が自らの能力を働かせることによって無知から真理を求め、不完全から完全へと進んでいくことになる。」<sup>50)</sup>と結論づける。

### 3. 信仰、内なる心を含む信仰

ここでの命題は、われわれは自分の信仰を導くある能力をもってはいないのか？神はわれわれに信仰の手立てを与えてはくれなかったのか？である。ナイチンゲールのキリストに対する認識としては「キリストは罪人を救うために、彼の血で洗い清めるためにこの世にきた。人を罪とその結果から解放すること、人の内に天国を置くこと、人と神を一致させることがキリストの真の使命であったし、地上における多くの者の使命<sup>51)</sup>であった。つまり、モーゼの述べる三位一体と原罪、救世主としてのキリストのことである。三位一体論 (Trinitarianism) について論じながら、彼女は、すべての人間は、神に属する真理を受け取る度合いに応じて、神の思考を考え、神の意識に与り、神と一つになる度合いに応じて神の化身ではないかと考える。三位一体とは、カトリック教徒等に代表されるように、キリスト教において父 (= 父なる神・主権)、子 (= 神の子・子なるイエス・キリスト)、霊 (= 聖霊・聖神) の三つが一体 (= 唯一神・唯一の神) であるとする教えである。ナイチンゲールは「三位一体論はユニテリアン主義よりも真実な真理である。」<sup>52)</sup>とする。そして、われわれは単なる器に過ぎない。神がそれを満たす。われわれはその器の土を落としきれいにしておくべきである。しかしながら、神の権威に関する点においては、スウェーデンボルグもアジジの聖フランシスの器もきれいであったが、彼らは異なった見解をしたと述べた。両者の相違とは何か？

先述したスウェーデンボルグは、スウェーデン生まれの聖職者であり、神秘主義者である。彼については筆者が既に『フローレンス・ナイチンゲールその神秘主義的思想』<sup>53)</sup>で検討した。彼の神秘主義思想は『思索の示唆』にも大いに反映されている。又、同じく器がきれいと言われたアジジの聖フランシスコ (ジョヴァンニ・ディ・ピエトロ・ディ・ベルナルドネ (Giovanni di Pietro di Bernardone 1182-1226) は、フランシスコ会の創設者として知られるカトリック修道士である。裸のキリストに裸でしたがうことを求め、清貧、悔悛と神の国 (kingdom of God) を説いた。中世イタリアにおける最も著名な聖人のひとりであり、カトリック教会と聖公会で崇敬される人物である。神の福音書の教えに従って清貧の中で生活し、宣教活動を行った。修道院の中に閉じこもって祈りと瞑想に身と心を捧げる従来の修道会と、フランシスコ会 (小さき兄弟団) はまったく性格を異にする集団であった。両者の相違は、その神の子としての生き方と宣教活動にある。時の国王を支持しながら、研究者・科学者としての研究に神の声を聴いた超越主義者スウェーデンボルグと、乞食のような生活と祈りの中で、神の声を聴いたフランチェスコ両者は、けがれのない一途な宗教心を有しているとナイチンゲールは考えたのであろう。

次にナイチンゲールは、「人間の思考のどの道筋においても、大きな前進をする為には他の全ての道筋と並行的運動が必要であると言われてきたことは正しい。」<sup>54)</sup>と述べた。そうでなければ霊性が衰えるとしてナイチンゲールは、ラプラスやコントなどの自然科学者、解剖学者、政治経済学者等が、働いてきた領域よりも基本的な真理の領域における無知と無知の交換を行ってきたにすぎない。真理のある領域における進歩は、他の領域における無知とは無関係になされるようだと述べる。人間生活の悪を正すために博愛主義的政治経済学者や現代の啓蒙的教育家によって大いなる努力がなされつつあるとして、コンベ、エリス、オウエン、ミル、コントは全て異なった信条を持っていたが、慈愛の社会的経済的分野では決定的な進歩を治めた。ナイチンゲールの述べるコンベという人物にはなかなか、たどり着けなかったのでここでは説明は省略する。

エリスは、19世紀のイギリスの経済学者ウィリアム・エリス (William Ellis 1794-1872) の事である。彼は、イギリスの宣教師であり作家である。労働者階級の両親のもとに生まれたエリスは、若い頃から植物への愛情を育み、庭師になった。彼は12歳で学校を中退し、最初はウィズベックで、次にイーリー島のソーニーで、後にアウトウェルに移り、ハードウィック牧師 (Rev. Hardwicke) のところで働いた。その後ロンドン北部の保育園で働き、最終的にはロンドンの裕福な家庭で働いた。転々と職を変えながら、彼は宗教的な性質を持ち、ロンドン宣教師協会のキリスト教宣教師としての訓練に応募し、入学することができた。1年間の訓練で、エリスは神学の知識と印刷や製本などのさまざまな実践的な技術を習得した。エリスの最も重要な仕事はポリネシア研究であり、彼は有能な民族誌のおよび地理的作家としての地位を確立した。

ロバート・オウエン (Robert Owen 1771-1858) は、イギリスの実業家、社会改革家、社会主義者である。彼は、人間の活動は環境によって決定されると考えた。人間の性格は本来善であるが、生後の環境によっては悪くなるので、幼児期によい環境を与えることによって、合理的な思考と行動を可能にするよい人格形成が促される必要があると発言し、「人間の幸福は、健康な肉体と安らかな心という土台の上のみ、築かれうる。」<sup>55)</sup>と述べた。彼は『自叙伝』<sup>56)</sup>でも述べたように脱宗教を宣言、社会主義思想に転じながら、独自の性格形成論を発表、労働者階級の子供たちに教育を施した。

ジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill 1806-1873) は、イギリスの哲学者、政治哲学者、経済思想家であり、政治哲学においては自由主義者である。彼については既に『ナイチンゲールとミルとの論争—ヒューの論文を手がかりに—』<sup>57)</sup>で触れた。内容はミルが推進する女性の権利運動及び女性の参政権に関することである。ミルがナイチンゲールに強く関心を持ったのは、本論の主題である『思索の示唆』に記述されたカサンドラに関することである。ミルは著作の中に登場するカサンドラがナイチンゲール自身であると直感し、ミルが知り得ない上流社会の子供の家庭内における告発に強い関心を持った。

イジドール・オーギュスト・マリー・フランソワ・グザヴィエ・コント (Isidore Auguste Marie François Xavier Comte 1798-1857) は、フランスの社会学者、哲学者である。コントは、社会学という名称を創始し、イギリスのスペンサーと並んで社会学の祖として知られる。1817年からアンリ・ド・サン＝シモン (Claude Henri de Rouvroy, Comte de Saint-Simon 1760-1825) の教えをうけ、助手を務めたこともあった。サン＝シモンの社会研究の態度はコントに受け継がれ、実証主義社会学として結実した。ちなみにサン＝シモンは、フランク王国の国王 (在位: 768-814) のカール大帝 (Karl der Große またはシャルルマーニュ (Charlemagne 742-814) の血統を引くフランスでも高位の貴族の末裔である。1841年から1847年までミルと親交があった。かつてコントは「女性は知的作業には極めて不適格」<sup>58)</sup>との意見を述べ、それは知性の内在的な弱さのせいであると述べたが、ナイチンゲールは、コントの見解とは違って女性の知性の内在的弱さではなく、社会において女性の知性や才能を活かす場所がないことが問題であると指摘した。ナイチンゲールはコントの言葉、「生活は心を目覚めさせて問いを抱かせ、心は知性を目覚めさせてその問いに答えを要求する。」<sup>59)</sup>を自身の著作に引用するほどに、女性が知性を持つべきことについて関心を持った。“感覚が外界を知るように神を感知し、神を理解する魂とか直観という特別な能力”という場合、その能力は“知性 (Intelligence)”であると述べた。ナイチンゲールは、経済学者たちが社会経済の分野では決定的な進歩をもたらしたが、これに宗教的影響を及ぼすことができれば、「正しい社会状態に効果をあらわすよう愛・義務・信頼の調和のなかでも人間を統合するのに成功するかもしれない。」<sup>60)</sup>と述べた。以上が社会学者としての地位を確立した方々であるからコンペなる人物も恐らく社会学者か社会改良などの類型にあたる人物なのであろう。

次にナイチンゲールは霊性とは何かについて問う。「人間よりも高い存在の意識によって喚起される影響をわれわれは霊的影響と呼ぶ。」<sup>61)</sup>と述べ、われわれが知覚するこれこそが人間性の最高の能力であると述べ、聖バーナード、聖イグナチウス・ロヨラ、パウロの聖ファンサンを例外としつつ、多くが霊性を高めるための方法として断食や祈祷を採用していると述べる。

聖バーナード (Bernard of Montjoux 923-1008) は、イタリア生まれの聖職者である。彼は一般的な教区牧師になり、アルプス山脈で宣教師の仕事をした。次に彼は、監督管区の学校および教会を建造したが、アルプス山脈で道を失った旅行者を援助するために、セント・バーナード峠にホスピスを設立した。聖バーナードは、40年間にわたってアルプス各地で伝道活動を行ってきたため、スキーヤーのパトロンおよび保護者になった。アルプスの救助犬、セント・バーナード犬は彼の名前にちなんでつけられた。

聖イグナチウス・ロヨラ (Saint Ignatius of Loyola 1491-1556) は、中世ヨーロッパ、イベリア半島中央部にあったカスティーリャ王国 (Reino de Castilla) 領バスク地方出身の修道士であり、カトリック教会の修道会であるイエズス会の創立者の1人にして初代総長である。彼の座右の銘「神のより大なる栄光のために (Ad Maiorem Dei Gloriam)」がそのままイエズス会のモットーとなり、イエズス会の精力的な活動は改革の原動力となった。彼は会員たちを欧州全域に派遣して、一般学校と神学校を各地に創設させ、普及に努めた。

パウロの聖ヴァンサンは、一般的にヴァンサン・ド・ポール (Vincent de Paul 1581-1660) と呼ばれる。彼は、貧者に尽くしたカトリック教会の司祭であり、カトリック教会と聖公会の両方で崇敬されており、1737年に聖人として列された。フランスのダクスで人文科学を学び、トゥルーズで神学を修めた。1600年に司祭に叙階され、財産相続のためにマルセイユに赴くまでそこに留まった。1605年、マルセイユから戻る途中で、トルコ人海賊に囚われの身となり、チュニスに連行されて奴隷として売り飛ばされた。彼の2番目の主人は棄教したフランス人であった。主人をキリスト教に回心させた後、1607年にその主人と2人で逃亡し、フランスのアヴィニョンに到着した。しばらくの間、彼はクリシーで教区司祭をしたが、1612年から著名な一族であるゴンディ家 (famille de Gondi) に仕えはじめた。彼はド・ゴンディ夫人の聴罪司祭及び霊的指導者であり、彼女の援助によりその領地で農民への宣教活動を始めた。1622年にはガレー船隊のチャプレンに任命され、ガレー船の奴隷への宣教に従事した。1625年、彼はラザリスト会 (Congregatio Missions) として知られる宣教司祭の修道会を創立した。1633年、ルイーゼ・ド・マリヤックの支援で聖ビンセンシオ・ア・パウロの愛徳修道女会を創立した。また、ヤンセニズムの異端とも戦った。ヴァンサン・ド・ポールは慈悲と謙遜、そして寛大さの誉れが高かった。彼の慈善と奉仕活動は有名になったので、ルイ13世 (Louis XIII 1601-1643) は彼を相談役として選んだ。しかし、マザラン枢機卿 (Jules Mazarin 1602-1661) との対立で宮廷から遠ざかり、フロンドの乱の間は貧しい者への世話に従事し続けた。フロンドの乱というのは17世紀フランスで起きた民衆と貴族勢力が結合し宮廷と対立した反乱である。1705年にラザリスト会の総長は、列聖調査を開始するよう要請した。ヴァンサン・ド・ポールは、1729年に教皇ベネディクトゥス13世 (Benedictus XIII 1649-1730) により列福され、約8年後の1737年には教皇クレメンス12世 (Clemens XII 1652-1740) により列聖された。1885年、教皇レオ13世 (Leo XIII 1810-1903) は、彼を愛徳修道女会の守護聖人とした。しかし、ナイチンゲールは言う。神と共にある生活を欲した人々は人間界から身をひいて暮らしていると。

次に、ユダヤ人の口からは自然にこぼれ落ちる言葉と、入念に考え抜かれ最高の知恵を示すマルクス・アントニウスの言葉とを比較してみるとナイチンゲールは述べるが、どのような言葉が最高なのか？彼女が述べるマルクス・アントニウス (Marcus Antonius 紀元前83-30) は、共和政ローマの政務官である。ガリア総督ユリウス・カエサル (別にシーザーともよばれる Gaius Iulius Caesar 紀元前100-44) のレガトゥス (総督代理) としてガリア戦争に従軍、アレシアの戦い (紀元前52年) やコンミウス相手の戦い (紀元前51年) で活躍した。アントニウスはその後、ギリシアへ渡り、紀元前57年よりグナエウス・ポンペイウス (Gnaeus Pompeius Magnus 紀元前106-48) の党派でシリア属州総督であったアウルス・ガビニウス (Aulus Gabinius 紀元前48頃) の配下になり、騎兵隊長となった。紀元前55年、ファラオの座を追われていたプトレマイオス12世アウレテス (Πτολεμαῖος ΙΒ' Αυλητή 紀元前117-51) の復位の為にエジプトへ侵攻した。この時にアントニウスは当時18歳のプトレマイオス朝の最後の女王クレオパトラ7世フィロパトル (Cleopatra VII Philopator 紀元前69-30) に魅了された。クレオパトラに魅了されたジュリアス・シーザーやアントニウスのクレオパトラを巡る愛憎劇は、ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare 1564-1616) の戯曲『アントニーとクレオパトラ』<sup>62)</sup>、『ジュリアス・シーザー』<sup>63)</sup> に描かれた。アントニウスの言葉、「舌が心に従わぬのか、それとも心が舌に思いを伝え得ぬのか—白鳥の柔毛のように、潮の満ち切った水面に浮かんで、どちらにも靡きかねている。」<sup>64)</sup> シェイクスピアの言葉を通して、更に翻訳者の言葉を通して伝えられる言葉は、ナイチンゲールが述べた自然にこぼれ落ちる言葉と入念に考え抜かれ最高の知恵を示す言葉に該当するのか？愚鈍な筆者には見当がつかない。但し、実際のアントニウスは、共和政ローマの政務官であるからエジプト人ではない。「人間の空しさを十分に知りたければ、恋愛の原因と結果を考察するだけで良い。」<sup>65)</sup> と述べたパスカルは、「クレオパトラの鼻、もしそれが小ぶりだったら、地球の表情は一変していたことだろう。」<sup>66)</sup> と述べた。

#### 4. カサンドラ

神の本質や信仰について論じた前節からは一転して『カサンドラ』でのナイチンゲールは、宗教的な概念を強く強調しながらも、“伝統的な社会”の冷酷な現実の中で、伝統的な規制に女性が服従している無意味な生活を繰り返し述べた。彼女は、女性たちが自己の生活も調整できないで、心霊的にも精神的

にも貧弱な生き物になっていると指摘、女性たちは「家庭内の白色奴隷」<sup>67)</sup>であると述べた。ナイチンゲールが、『カサンドラ』で問題にしたのは社会や家庭生活における女性の位置づけであった。神が自ら創った女性に無意味な生き方を強いるはずがないと考えたナイチンゲールは、女性にも神に与えられた使命があると考えた。それは、彼女自身の人生観や生活信条に向けたその内面の吐露である。

カサンドラという名前はナイチンゲールが1849年に経験したエジプト旅行時に、エジプトの歴史や宗教を研究した際に知り得た召使の名前である。カサンドラは、もとはトロイ国の王女である。『ギリシャ神話』<sup>68)</sup>によれば、美しいトロイ国の王女、カサンドラに恋をしたアポロンは、王女に数々の贈り物をした。その贈り物の中に未来を予見する能力があった。しかしながら、カサンドラ王女がアポロンの愛を拒否してしまったために、怒ったアポロンは、カサンドラ王女に与えた予知能力を取り上げる代わりに、周囲の者の耳を塞いでしまい、カサンドラ王女の言うことが聞こえないようにしてしまった。有名なトロイ戦争でカサンドラ王女は、場外に置き去りにされたギリシャ軍の置物の危険性を予見し、城内に入れてはならないと強く進言した。しかし、アポロンによって耳を塞がれたトロイ軍は、城壁の門を開け、置物を城内に引き入れてしまう。結果、トロイ軍は一夜のうちにギリシャ軍に敗北、カサンドラ王女はギリシャ軍に連行され、奴隷として辛酸をなめたという物語である。

奴隷になったカサンドラ王女と家庭内の奴隷であると感じている自身を重ね合わせたナイチンゲールは、著作の序言に「およそ、人はだれでも寄る辺なく野に人生の辛酸をなめながら、一人さ迷う事が良くあります。そのような人はもっと住み良い世界を求めて避難したい衝動に駆られる事でしょう。しかし恐らく、もしこの世から、未熟なままで身を引いたりすると再び苦しみとおさねばならないことになります。未熟なままで生まれる事は新しい生命を生き続ける力を十分にもちませんし、その新しい生命は再びやり直しをしなければならなくなるからです。」<sup>69)</sup>と述べた。今風に言うならば“早すぎた目覚め”である。

カサンドラにおけるナイチンゲールの早すぎた目覚めの苦悩は、暗闇から明るい光の中に一人出てきた自身の苦悩であり、プラトン(Plátōn 紀元前427-347)のイデア論にも近い。プラトンは、太陽の放つ光線は見えないが、私たちの視覚で見えるものを見えるようにし、洞窟は、暗闇であり、見えるものを見えないようにすると述べ、「知的世界においてかろうじて見てとれるものとしてのイデアは、いったんこれが見てとられたならば、すべて正しく美しいものを生み出す原因である。」<sup>70)</sup>と述べた。彼は、見られる世界においては、光と光の主を生み出し、思惟によって知られる世界においては、自らが主となって君臨しつつ、真実性と知性を提供するものである。光の中にいると光を感知するのは難しいが、暗闇にいると一筋の光ははっきりと見え、これが光明となって進むべき道、いわゆる目的を明確に示すと考えた。プラトンの国家論の翻訳を手伝ったとされるナイチンゲールは、「属性としては人間のもののように見えながら、程度においては人間を超えている力と知恵が、その意思と目的の中に明らかである。」<sup>71)</sup>と述べ、次の「理性と哲学は今や真理を仲良く追究するというより、迷信と教条主義に反対するために腕を組んでいる」<sup>72)</sup>という考えにつながる。真理の探究に関わる限り、それは、神秘主義と哲学における探究が、われわれの存在するものと、意志と目的が人類に及ぼすことの明白さについての論評である。

ナイチンゲールは「いつになったら私たちは、一主の掟を悟り、それを使いこなせる人のように平静さと自信とをもって一ゆるぎない熱情に満ち、家路を風に逆らって飛ぶ鳥のように真っすぐに目的に向かう人生を歩めるのか。」<sup>73)</sup>と述べ、目的に向かう人生がなかったら、ミケランジェロや、パスカル、アイザック・ニュートンはその才能を開花させることはできなかったと述べた。ミケランジェロ・デイ・ロドヴィーコ・ブオナローティ・シモーニ(Michelangelo di Lodovico Buonarroti Simoni 1475-1564)は、イタリアルネサンス期の彫刻家、画家、建築家、詩人であり、西洋美術史上のあらゆる分野に、大きな影響を与えた芸術家である。ミケランジェロ自身は彫刻分野を本業とし、それ以外の作品は決して多くはないが、様々な分野で優れた芸術作品を残したことから、レオナルド・ダ・ヴィンチ(Leonardo da Vinci 1452-1519)と同じく、ルネサンス期の典型的な“万能の人”呼ばれ、現在でも西洋美術史上における最高の芸術家の一人と見なされている。

ブレーズ・パスカル(Blaise Pascal 1623-1662)は、フランスの哲学者、自然哲学者、物理学者、思

思想家、数学者、キリスト教神学者である。その他、パスカルの三角形、パスカルの原理、パスカルの定理などの数学分野での発見で知られる。『パンセ』<sup>74)</sup>に示されたパスカルの「人間は考える葦」<sup>75)</sup>は有名であり、哲学という言葉を知らない時代から筆者もその言葉と意味について小学校の先生から聞いていたが、理解不能であった。今は多少、納得がいく。

「人間は一本の葦にすぎない。自然のなかで最も弱いもの。しかし、それは考える葦だ。人間を押しつぶすのに、宇宙全体が武装する必要はない。一吹き蒸気、一滴の水だけで人間を殺すのに十分だ。しかし、宇宙に押しつぶされようとも、人間は自分を殺すものより更に尊い。人間は自分が死ぬこと、宇宙が自分より優勢にあることを知っているのだから。宇宙はそんなことは何も知らない。こうして私たちの尊厳の根拠はすべて考えることのうちにある。私達の頼みの綱はそこにあり、空間と時間のうちにはない。空間も時間も、私達が満たすことはできないのだから。だから、よく考えるように努めよう。ここに道徳の原理がある。」<sup>76)</sup>パスカルの『パンセ』はどちらかと言えば、哲学的というよりは、神学的な立場から神や人間についての探求的要素の強い著作である。

サー・アイザック・ニュートン (Sir Isaac Newton 1642-1727) は、イギリスの自然哲学者・数学者・物理学者・天文学者・神学者である。主な業績としてニュートン力学の確立や微積分法の発見がある。国際単位系 (SI) における力の単位であるニュートン (newton) 記号は、ニュートンに因むそうである。ニュートンは、リンゴが落下するのを見て万有引力のアイデアを思いついたとの逸話は有名である。「なぜリンゴはいつも地面に向かって垂直に落ちるのか？」と考えたニュートンは、理由は疑いもなく、地球がリンゴを引き寄せているからだ。物質には引き寄せる力があるに違いない。地球にある物質の引く力の総量は地球の中心にあるのであって、地球の中心以外の所にはないに違いない。だからこのリンゴは鉛直に、地球中心に向かって落ちるのだ。物質が物質を引き寄せるのであれば、その量は物質の量に比例するに違いない。それゆえ、地球がリンゴを引き寄せるように、リンゴもまた地球を引き寄せるのであると考えた<sup>77)</sup>。

ナイチンゲールは、「女性は知性、倫理的行動、情熱という三つの徳を兼ね備えていながら、なぜ社会においてその三つのうちどの一つもいかせられるような場所を見つけれないのか？」<sup>78)</sup>と述べた。カサンドラでナイチンゲールは、女性達がこれを受け入れてきたと述べ、社会が女性の知性を浪費していると激しく告発したのである。コントの見解とは違ってナイチンゲールは、社会において女性の知性や才能を活かす場所がないからであった。彼らも又、その才能を活かす場所があったから、天賦の才能が開花したのであった。ところが女性はどうか。その才能を活かす場所もなければ、夢を見ることさえ、叶わない。女性達も有しているその知性でもって広い社会に飛び出したいのに、邪魔が入り、社会がそれを許さない。ナイチンゲールは女性達がこれを受け入れてきたと述べ、社会が女性の知性を浪費していると激しく告発した。「男性にとっても女性にとっても、家庭は不滅の精神の発展する場としては狭すぎる。その小さな範囲では、不滅の精神を持った人が、創造主から授かった資質や才能によって運命づけられている仕事を行う機会は何一つもない。」<sup>79)</sup>家庭は創造主から授かった能力を使う場ではなく、天職として神が授けたその能力を使う機会もないと家庭生活を非難しながら、ナイチンゲールは現時点において女性の知性は満足できないものであると告発し、幼児期にそうした強制不能な精神が形成されると言及した。「男性と女性の義務は平等であるということが認められないのは、男性ではなく、むしろ女性である。」<sup>80)</sup>結婚をした女性達は夫の仕事の為に献身しなければならず、従属的な役割を果たす。それがゆえに女性達は自身の生涯の仕事を持っている人はほとんどいない。サマーヴィル夫人、チズホーム夫人、フライ夫人の様に自分の仕事をあきらめずにやれる人はほとんどいないと述べた。

ナイチンゲールが引き合いに出したサマーヴィル夫人とは、恐らくメアリー・フェアファックス・サマヴィル (Mary Fairfax Somerville 1780-1872) の事であろう。彼女は、スコットランドのサイエンスライター (science writer) であり、科学の視点から関連する記事を専門的に書いたジャーナリストである。彼女は、女性による科学への参加が非常に限られていた時代に活躍し、数学と天文学を学び王立天文学会の初の女性会員にノミネートされた。ミルが女性参政権を求めて議会への大規模な請願を組織した際、サマヴィル夫人に請願署名者の筆頭になってもらえるよう頼んだことでも知られ、ヨーロッパで最も傑出した女性であったと称賛される女性である。

チズホーム夫人とは、キャロライン・チザム (Caroline Chisholm 1808-1877) のことであろう。彼女はイギリスの人道主義活動家であり、オーストラリアの移民女性と家族の福祉支援を行ったことで知られる。キャロラインは、東インド会社のマドラス軍に所属する将校のアーチボルド・チザム (Archibald Chisholm) と結婚した。彼がローマ・カトリック教徒であったのでキャロラインもカトリックに改宗し、子供たちをカトリック教徒として育てた。1849年にナイチンゲールとも関係の深い第8代シャフツベリー卿 (Anthony Ashley-Cooper 1851-1885) やイギリスの政治家シドニー・ハーバート卿 (Sidney Herbert 1810-1861)、土木技術者で慈善家のウィンダム・ハーディング (Wyndham Harding 1817-1855) 等の支援を受けて、家族植民地貸付協会を設立した。

エリザベス・フライ女史 (Elizabeth Fry 1780-1845) は、19世紀前半に活躍したイギリスの監獄改良・慈善事業家である。彼女はロンドン・ニューゲート監獄における女性受刑者の処遇改善や監獄内の児童に対して教育を開始するなど、19世紀を代表する社会改良家である。彼女の活動に影響を受けたテオドール・フリードナー牧師 (Pastor Theodor Fliedner 1800-1864) は、プロテスタントの牧師として、ドイツのカイゼルスウェルトに赴任した際に、フライ女史の女囚保護事業活動をドイツに広めようとした。その一環として1836年に女囚保護施設及び看護師の養成所も含めたカイゼルスウェルト学園を創立した。この学園でナイチンゲールも短期間学んだ。以上3名の女性達は共に結婚をし、子どもを産んで育てながら社会貢献をした者達である。ナイチンゲールは、これら3名の方々は例外であり、多くの女性達は人生に疲れ切っていると述べた。女性達は知性を働かせる糧がないこと、心情の為の糧がないこと、活動のための糧がないこと、それが何でもないと云えるのか？これは人々が女性達には知性や心情がないと思っているからなのか？大切なのは身体だけなのか？人生は例外なく不完全であると考えたナイチンゲールは「テニスンやミルンズ、ブラウニング夫人をミルトンやバイロンと比較してごらん下さい。昔の巨匠の綿密な作品と比較して現代のこれらのスケッチが未完成の状態であると人を深く印象付けるが、それは才能の聖ではなく、美術家の絵、作家の文章、これらは全て芸術作品として粗削りで不完全、未完成なものである。」<sup>81)</sup> と述べた。

アルフレッド・テニスン (Alfred Tennyson, 1st Baron Tennyson 1809-1892) は、ヴィクトリア朝時代のイギリスの詩人である。彼は牧師の子として生まれ、ケンブリッジ大学に学び、学友の死と進化論によって揺れ動く信仰をうたった詩などがある。

リチャード・モンクトン・ミルンズ (Richard Monckton Milnes, 1st Baron Houghton 1809-1885) は、政治家であり、詩人でもある。彼はテニスンを擁護し、社会正義を貫く政治家であった。彼の作品についてはニューマンも高く評価したようである。又、ミルンズは、ナイチンゲールに執拗に求婚したが、ナイチンゲールは最終的に彼との結婚を断った。しかし、ミルンズは政治家シドニーと共に彼女の最も忠実な支持者の1人であった。そのことは彼女の生涯史にも記述されている。又、ミルンズは女性作家の優れた識字能力に感心し、女性の権利の擁護者でもあった。

エリザベス・バレット・ブラウニング (Elizabeth Barrett Browning 1806-1861) は、イギリスの詩人である。ブラウニングは自宅で教育を受け、4歳の頃から詩を書き始めた。1821年頃までに彼女はメアリー・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft 1759-1797) が1792年に著した『女性の権利の擁護』<sup>82)</sup> を読み、ウルストンクラフトの政治思想の熱心な支持者になっていた。ブラウニングは当時の医学では診断できなかった病気 (脊椎の病) と闘っていた。彼女は幼い頃から、鎮痛薬としてアヘン剤やモルヒネ等の薬物を使用していた。その為、活動範囲は狭められたが、逆にそのことが執筆活動に集中できて有利であった。エリザベスの詩集 (1844) は彼女に大きな成功をもたらした。作家のロバート・ブラウニング (Robert Browning 1812-1889) はエリザベスを賞賛、彼らは生涯の伴侶となった。以下の二人は1780年代の時代になる。ゆえにナイチンゲールをして綿密と言わしめた人物たちになるが。

ミルトンについては、ローのところで説明したので、ここでは省力する。次のジョージ・ゴードン・バイロン (George Gordon Byron, 6th Baron Byron 1788-1824) は、イギリスの詩人である。バイロン卿として知られ、1805年にケンブリッジ大学に入学したが、学業を顧みず放埒な日々を過ごした。詩集なども出版したが、数多くの女性との恋愛を重ねた。政治的にはホイッグ党 (Whig Party) 支持者でありトーリー党 (Tory Party) の外交政策を批判した。ホイッグ党は、かつて存在したイギリスの政党で

あり、後の自由党及び自由民主党の前身にあたる。ホイッグ党の起こりは、イギリス王チャールズ2世 Charles II 1630-1685) の時代の王位継承問題で、カトリックであったチャールズ2世の弟ヨーク公ジェームズ (James VII of Scotland and James II of England 1633-1701) の即位に反対の立場をとった人達をさして“Whiggamore (謀反人)”と言ったのが始まりである。ホイッグ党の創設者は初代シャフツベリー伯爵 (1st Earl of Shaftesbury アントニー・アシュリー＝クーパー Anthony Ashley-Cooper 1621-1683) である。バイロンは、1823年にギリシャ暫定政府代表の訪問を受け、ギリシャ独立戦争 (1821年オスマントルコからの独立) へ身を投じることを決意、参戦したが、熱病により同地で死亡した。彼は私生活では乱れた生活をしたが、その激情的な内面は作品に現れたのであろうか？詩人としてもかなり賞賛された。そうした著作業の方々と対比しながら、ナイチンゲールは、いつになったら女性が自分の研究に没頭している姿を見ることができるのか？ナイチンゲールの疑問は続く。

ナイチンゲールは『新約聖書』における“神の下での平等”思想から「イエス・キリストは女性を哀れまれて、単なる奴隷、単なる男性の情熱の僕としての地位から引き上げられて主の僕とされたのです。」<sup>83)</sup>と述べ、キリストが女性を男性に従属するという位置づけから解放され、男性同様、創造主の僕になさったと述べる。ナイチンゲールの考えでは男女間には従属関係は存在しないのであった。女性が神の直接の僕であるならば、神が求める仕事を女性も行っていいはずである。神が求める仕事とはいったい何？それは人のために役立つ仕事であり、社会に奉仕することであった。1851年の『カイゼルスベルト学園に寄せて』<sup>84)</sup>の冒頭の言葉、「19世紀は女性の世紀」<sup>85)</sup>にもあるようにそれは女性擁護の立場である。彼女は、カイゼルスベルト学園で見聞した内容や看護師としての学びの経験を論じながら、ナイチンゲールは、神の子としての女性の生き方についての自身の考えの確かさの確証を得、行動主義 (behaviorism)・実践主義 (pragmatism) 的な行動を取る。自由を得て婦人病院での監督官としての病院改革、この件については『ナイチンゲールの組織管理論—他者をコントロールするにはまず、己をコントロールせよ—』<sup>86)</sup>で検証・検討した。そしてクリミア戦争への従軍と野戦病院内での兵士たちの処遇改善、そこで見聞した戦争被害者たちへの憐憫の情、と戦後の陸軍改革への道筋は、彼女自身が目指した理想的な生活であったろうか？その理想を貫き通したいという願望は、必然的に見聞して認識した悪弊をその高邁な感情があるがゆえに後には引けない改善の為の闘いとなり、結果的に苦悩の日々をもたらした。

「理想的な生活というものは、善いものをどこまでも追求し、大きな目的に一心不乱に従事し、優れた理想と高邁な感情に対して共感する気品ある計画の中で生きられるものです。」<sup>87)</sup>ナイチンゲールは家庭生活の無為さを非難し、上流社会の女性達の伝統的な生き方を非難し、それを受けいれている女性たちを非難し、女性であっても高い理想を持って生きるべきであると主張した。彼女の姿勢は今日起きている現象をそのまま受け入れるのではなく、科学的な根拠を持って物ごとを観察し、問題を認識し、目指す目標を明確にし、問題の改善を図り、変化させていこうとする姿勢である。そして、クリミア戦争終結後に帰国した彼女の心身は疲労しきっていたはず。しかしながら、彼女の高邁な感情と心が為さずにおかなかったこと、それは彼女自身がクリミア戦争従軍中の経験・認識した事であり“鉄は熱いうちに打て”の実践的行動主義者であった。実際の業績としては1858年の著作『女性による陸軍病院の看護』<sup>88)</sup>がある。同著は自身のクリミアでの体験を記しつつ、その総括と病院看護を良くしていくための試案であり、報告書である。ナイチンゲールが「経験的法則とは観察によって得られた一定の性質であり、究極的法則に帰結すると推定されるがまだそうならないものを言う。」<sup>89)</sup>と述べた。クリミア戦争で悲惨な体験をしたナイチンゲールは、その厳しいほどの観察力で事の子細を洞察した。彼女は、経験したことから学習せよ (Learning to Learning) の経験主義者 (Empiricism) 的な考えを有し、クリミアから帰国後に実施したのが“陸軍の改革”である。本件については筆者の『ナイチンゲール—イギリス陸軍を改革する—学習 (経験) したことから学習せよ』<sup>90)</sup>がある。一連の改革も、彼女が見聞した問題の認識から行為へのプラグマティズム的思想であろう。1860年には看護教育機関の創設と同時に『看護覚え書』と『思索の示唆』を著した。

## II. ナイチンゲール -ism の世界

以上、検証してきたように、『思索の示唆』はナイチンゲールの宗教観や思想的見解を述べた著作であり、日常生活における現象と人間の認識との関係を哲学的・神学的に論じようと試みた著作である。本著で示された -ism には、キリスト教主義、科学主義、プラグマティズム (Pragmatism)、経験主義 (Empiricism)、行動主義 (Behaviorism)・実践主義 (Pragmatism)、ジャコビティズム (Jacobitism)、神秘主義 (Mysticism)、カトリック主義 (Catholicism)、物質的快楽主義 (Material Hedonism)、ユニテリアン主義 (Unitarianism)、超越主義 (Transcendentalism) 等があり、それぞれ、彼女の成長・発達段階において、身近な、あるいは著作などから影響を受けたと思われる -ism の世界である。

本著に掲載された人物は、哲学者8名、神学者4名、聖人5名、政治家2名、詩人8名、芸術家5名、科学者4名、社会事業・福祉家3名等と多彩であった。彼らは歴史上、著名な方々であり、彼らを通してナイチンゲールが掘り下げた神と人の本質探求が『思索の示唆』の命題であるかに考えられた。その“ism”の世界は、高邁でありながら、実は社会の現象としてなおざりにされていると彼女が認識した女性問題へ転換される。彼女は自身を「無学な愚かな者」<sup>91)</sup>と評したが、どれだけ、知識欲が旺盛であり、いかに知的向上心が高かったかという事である。イギリス社会あるいは、ヨーロッパ、諸国における哲学的・宗教問題、神秘主義・科学主義等から影響を受けたナイチンゲールは、神への信仰や内なる信仰、そして父なる神は思考・目的であり展開する意志であるとの論点などは、彼らからの影響が少なからずあったと考えられる。

著作の中で、ナイチンゲールは、「神が信頼・愛・尊敬の対象であることを発見しなければ、神の存在や神の本質に関する観念的な思考はほとんど意味を持たない。」<sup>92)</sup>と述べ、「もしわれわれが人間を正当に評価し、正しい関係を維持しようとするれば、われわれの全能力が必要である。われわれの全能力を働かせない限り、われわれは人間を正しく評価することも人類の中で生活を営むこともできない。」<sup>93)</sup>と述べた。

ナイチンゲールは極めて早い時期から神の啓示を受けたと記されている。ナイチンゲール家は家系的には、三位一体論に反対し、父なる神だけを認めるユニテリアン (Unitarian) であったが、実践的にはイギリス国教会に属していた<sup>94)</sup>。しかし、彼女はイタリアを中心に広まったローマン・カトリック (Roman Catholic) にも関心を示し、当時のイギリス社会におけるキリスト教の解釈に疑問を感じたりもした。1846年、ナイチンゲールが、友人メアリー・クラーク (Mary Clarke Mohl 1793-1883) に宛てた手紙には、見えざる王国が見える王国と自由に交流していることを語る類の本が好きであると述べている。天界との交流ができるとして神秘主義的な立場から多くの著作を書いたのはスエーデンボルグである。彼は『天界と地獄』<sup>95)</sup>、『結婚愛』<sup>96)</sup>など多数の著作を著した神秘主義者である。彼は天界に行くことができ、天使たちと語りことができ、霊界のことや霊魂について語りことができ、内なる魂も含め、全ての事象について示すことができる人物であった。多様な宗教と科学時代の到来の洗礼を思いきり受けたナイチンゲールは、成長・発達段階において、神秘主義的要素が強まり、神の存在と日常生活の様々な現象とが、神との一体感の中で生まれるものであると感じ、真実の目は真理の探究につながると考えた。キリストの教えに忠実であろうとするナイチンゲールは「信仰こそが魂の真の目であり、耳である」<sup>97)</sup>と述べた。ナイチンゲールは本当に見る目を与えられるとき、神はすぐ身近におり、失われたと思うものもすぐそばに存在しているのだから、神の身元に行く必要もないのだと感じた。パスカルも又、「人間は信仰なしでは真の善も正義も知ることはできない。」<sup>98)</sup>と述べている。

多感な時代にナイチンゲールに影響を与えた人々、それは、ストレイチーが『ヴィクトリア朝時代の偉人たち』<sup>99)</sup>で筆頭に掲げたローマ・カトリックの聖職者ヘンリー・エドワード・マニング (Henry Edward Manning 1808-1892) 大司教、フランス修道女会のバーモンゼイ修道院長 (Mother Superior of the Bermondsey (Sister Mary Clare) Georgiana Moore 1814-1874) 等であった。彼らとの交流が彼女の宗教観に大きく影響を与えたのであろう。ヴィクトリア朝時代のイギリスは、世界を支配し意気盛んな時代であったが、その裏には様々な問題や思いが混沌としていた。ドイツの哲学者フレデリック・ウィルヘルム・ニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche 1844-1900) の“神は死んだ”の表現からも伺える

ように、伝統的形而上学を幻の背後世界を語るものとして堂々と否定された。その影響は、実存主義 (Existentialism) やポスト構造主義 (Post-structuralism) にも及び、イギリス文化の新たな方法を模索しなければならない状況にまで至った。実存主義とは、実存を哲学の中心におく思想的立場であり、ポスト構造主義とは学問研究の一つの原理的主張で、観察対象の基盤に在る構造を明らかにし、その見地から対象を説明しようとする態度を継承する立場である。彼らは神の死を宣言し、ニーチェを先駆者としてドイツに広がり、第二次大戦後、フランスの哲学者ジャン＝ポール・シャルル・エマルル・サルトル (Jean-Paul Charles Aymard Sartre 1905-1980) 等によって世界的な広がりをみせた。ポスト構造主義は、ミシェル・フーコー (Michel Foucault 1926-1984) に代表される思想運動の総称である。構造主義は、現象学に影響を受けたフランスで、1960年から1970年頃に誕生した。そして、思想や芸術の分野での困難と苦渋は、西欧19世紀末の精神世界に極めて大きな衝撃を与えた。これは、現象を超越し、その背後にあるものの真の本質、存在の根本原理、存在そのものを純粹思惟により直感で探求するのではなく、時間・空間内にある個体的存在として本質を現実化していく科学時代の到来を意味した。

先述したアーノルドの息子でイギリスの詩人で批評家のマシュー・アーノルド (Matthew Arnold 1822-1888) の『文学とキリスト教義』<sup>100)</sup> には、科学思想の洗礼をうけたイギリス国民が、従来から受けてきた天国や地獄、永遠の命などにはありえないといったことや、宗教と道徳の関連性などが論じられるようになった。マシューは、本来、実践のための書である『聖書』を、「聖書にはありせぬ科学と、難解な形而上学と誤認した」<sup>101)</sup> と述べ、聖書を本来あらぬものとし、聖書の中に本来あらぬものを注ぎ込もうとしたと述べている。その結果、彼は実践が科学と教養の欠如のために阻害されたと結論付けた。ナイチンゲールの生涯を描いたセシル・ウーダムスミスは、「ナイチンゲールは神秘主義ではあったが、単なる思弁的神秘主義者ではなく、行政的であり、行動的で精力的な実生活に身を投じながら、神との一体感を持っていた」<sup>102)</sup> と述べている。そしてナイチンゲールは、友人のベンジャミン・ジョウエット (Benjamin Jowett 1818-1890) との関わりの中で、神秘主義の普遍性を説いた。中世神秘主義 (mysticism) の多くは、プラトンの教えに近いと記述されている。思弁的と言うのは、経験によらず、思考や論理にのみ基づいていることを言う。又、ヨーロッパでは中世を約500年頃から1300年頃までを言い、日本では戦国時代にあたる。ナイチンゲールの生涯史には、神と共に生きるということは「プラトンのアイデアとともに生きるということであり、それは単なるアイデアについて思考を廻らすことだけでなく、アイデアのために行動し労苦を負うことなのです。」<sup>103)</sup> と記述され、ナイチンゲールの神秘主義は受動的なものではなく、あらゆる経験の目的は行動の強化であると説明している。

神秘主義との関係において“感覚が外界を知るように神を感知し、神を理解する魂とか直観という特別な能力”という場合、その能力は“知性 (Intelligence)”であるとナイチンゲールは述べ、主知主義 (intellectualism) 的傾向をも示した。主知主義とは、一般に知性や知性的なものを尊重する態度を言う。認識論的には感覚論、経験論、直観主義に対立して、実在は理性によって把握できるという古代ギリシャの哲学者プラトンやアリストテレス (Aristotelēs 起原前384-322) に代表される立場を指す。父なる神は知・善・愛・力であると考えたナイチンゲールは、父なる神は全体が自己展開する意志として存在すると述べ、「知・愛・義が個別の事例において何と何を自問せよ。自分の性質を知・愛・義であるように訓練せよ。そうすれば神がわかるであろう。そうすれば神はあなたの存在の一部になるだろう。このためにはあなたは自分の性質にとって有益な環境に身をおかねばならないということは真実である。」<sup>104)</sup> と述べた。キリストの教えに忠実であろうとするナイチンゲールは、真理の探究に関わる限り、「われわれの存在するものと意志と目的が人類に及ぼすことは明白である。」<sup>105)</sup> と述べた。スウェーデンボルグが、科学的な解釈を神学論との合体で説明したように、ナイチンゲールも、人類が自らの能力を働かせることによって無知から真理を求め、不完全から完全へと進んでいくものであるとし、「人間の道徳的、知的、精神的能力が高度に啓発されればされるだけ神についての真の概念に近づく」<sup>106)</sup> と考えたナイチンゲールは、「理性と感性と良心のうちでは、真に啓発された感性が最も真なる神概念を与えるものである。」<sup>107)</sup> と述べ、これらすべての調和的発達が真なる概念を与えるとして、神の善は神の知恵や力よりいっそう高度な属性であるとした。

ナイチンゲールは「もし、我々が人間を正当に評価し、正しい関係を維持しようとするれば、我々の全

能力が必要である。』<sup>108)</sup>と述べ、「人間が自らの能力を働かせることによって無知から真理を求め、不完全から完全へと進んでいく」<sup>109)</sup>と述べる。ナイチンゲールにとって知識は単なる知識ではなく、行動するために必要なものであった。そして、ナイチンゲールの姿勢は現実の社会における矛盾点を指摘、改革しようとする積極的な態度につながった。デンマークの宗教思想家ゼーレン・キルケゴール (Soren Aabye Kierkegaard 1813-1855) の解釈に従えば、神に対する愛こそ、真の利己愛であり<sup>110)</sup>、神の立場からすれば自己愛とは神に対する愛に他ならない<sup>111)</sup>。つまり、あらゆる行動を決定するのは神の意志であるとともに自分自身の意志でもある。

## おわりに

結局、『思索の示唆』は、彼女が、畏るべき主題である宗教が権威もなく放置されているとはなんと絶望的な事かと述べたように、イギリスの宗教改革以降の、様々な宗教の乱立、そしてそれに伴う国民の宗教への無関心さと道徳的退廃をナイチンゲールが認識したことによる。ゆえに、イギリス社会における宗教的・道徳的退廃から、信仰に目を向けさせていかに人々を道徳的にするかという命題が本筋のように思えた。その論述の仕方は『看護覚え書』に見られるようにそうであることと、ないことを列挙しながら、そうであらねばならないことを多彩な登場人物たちを例題にしつつ、あるべき姿に向けさせようとした意図が感じられた。それは最終的に徳の問題である。イギリスの教育改革でみる限り、近代社会主義の創始者であるオウエンが実施した教育もアーノルドの教育改革も基本的には徳の問題である。彼の「性格形成学院」の実践は、直観教授などの進歩的方式を採用し、世界最初の幼稚園と言われた。アーノルドの教育目的は、第一に宗教的・道徳的情操の高揚、倫理的な原理、第二に紳士の行動の実践、第三に知的能力の開発である。つまり、アーノルドの教育は道徳的・倫理的な原理・原則の理解、とその実践、最後に知的能力の開発にあったことから、知育よりも徳育、道徳的な人格形成の面に重点がおかれていた。労働者階級の健康を脅かす極貧、過酷な労働、無知に加え、公衆衛生の悪さはフリードリヒ・エンゲルス (Friedrich Engels 1820-1895) がその著作で再三指摘している。

本著に掲載された人物は、哲学者、神学者、聖人、政治家、詩人、芸術家、科学者、社会主義思想家等と多彩であった。彼らは歴史上、著名な方々である。これらの人物を通して神と人の本質探求がナイチンゲールの命題であるかに考えられた。イギリス社会あるいは、ヨーロッパ、諸国における哲学的・宗教問題、神秘主義・科学主義等から影響を受けたナイチンゲールは神への信仰や内なる信仰、そして父なる神は思考・目的であり展開する意志であるとの論点がある。そして、人間の自然的な、霊的な、天的な意志と理解が潜在的に存在するがゆえに、人間は自然の中に在るところの社会的な、道徳的なものや、自然を超越した霊的な天的な物を分析的に合理的に考えることができる。そうすれば、人間の知恵は引き上げられて、神を見ることすらできるのである。ナイチンゲールも、人類が自らの能力を働かせることによって無知から真理を求め、不完全から完全へと進んでいくものであるとし、人間の道徳的、知的、精神的能力が高度に啓発されればされるだけ神についての真の概念に近づくと考えた。

ゆえに、ナイチンゲールの“-ism”の世界は、高邁でありながら、実は社会の現象としてなおざりにされていると彼女が認識した女性問題へ転換され、キリスト教主義思想を基本に神秘主義、超越主義、カトリック主義、ユニテリアン主義、科学主義、プラグマティズム (行動主義) 等多くの思想家たちの影響を受けた世界であった。実践主義的な行動は、彼女なりの神の解釈から、自然界における現象を良く見極め、その鋭敏な観察力が現象認識に至らしめ、そのキリスト教的愛の心が、彼女の知性において問題解決するといった科学的手法として活かされ、その解決において実践を重要視したと考えられた。それは、ナイチンゲールがイエス・キリストの教えに忠実であろうとした考えに従ったが所以であろう。そして、マシューがキリスト教における実践の有意性を強調したように、ナイチンゲールにおけるキリスト教的愛の実践が看護であったが、その実践には観察を主体とする主知主義的傾向が強く残された。

本論を通して筆者は、ナイチンゲールは自身を無学な愚かな者と評したが、とんでもなく知識欲および知的好奇心が旺盛であったことか。パウロが目からうろこという表現をしたが、筆者も又、ナイチンゲールを通して目からうろこの経験をした。

注釈

- 1) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale (1860), Cassandra/Suggestions for Thought, Pickering & Chatto Limited, 1991.
- 2) Florence Nightingale (1860) : Suggestions, or Thought to searchers after religious truth, (湯槇ます他訳：ナイチンゲール著作集第三巻, 思索への示唆, p188, 現代社, 1985年.)
- 3) Litton Strachey : Eminent Victorians, p154, Penguin Books, 1986.
- 4) Florence Nightingale (1888) : To the nurses and probationers trained under the "Nightingale Fund", (湯槇ます他訳：ナイチンゲール著作集第三巻, 看護師と見習い生への書簡, p307, 現代社, 1985年.)
- 5) Sir Edward T.Cook : The Life of Florence Nightingale , (中村妙子他訳：ナイチンゲール [その生涯と思想 I・II・III], 時空出版, 1993年.)
- 6) Cecil Woodham-Smith (1950) : Florence Nightingale, (武山満智子他訳：フロレンスーナイチンゲールの生涯 [上・下巻], 現代社, 1987年.)
- 7) ルーシー・セーマー著, 湯槇ます訳：フローレンス・ナイチンゲール, メジカルフレンド社, 1885年.
- 8) バーバラ・ハーメリンク著, 西田明訳：ナイチンゲール伝, 近代看護の創始者, メジカルフレンド社, 1987年.
- 9) 清水幾太郎編：世界の名著46 スペンサー, 『科学の起源』, pp337-396, 中央公論社, 1995年.
- 10) 清水幾太郎編：世界の名著46, スペンサー, 『進歩についてーその法則と原因』, pp399-442, 中央公論社, 1995年.
- 11) 清水幾太郎編：世界の名著46), スペンサー, 『知識の価値ー教育論第一部』, pp445-486. 中央公論社, 1995年.
- 12) 清水幾太郎編：前掲書9), p457.
- 13) Florence Nightingale (1860) : Note on Nursing , Scutari Press, 1992.
- 14) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale : 前掲書1), pp5-38.
- 15) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale : 前掲書1), pp39-204.
- 16) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale : 前掲書1), pp205-239.
- 17) 下中弘編：哲学辞典, 平凡社, 1998年.
- 18) 金子雄司. 富山太佳夫編：世界人名辞典, 岩波書店, 1997年.
- 19) 日本聖書協会：聖書 (旧約聖書続編つき), 三省堂・星共社, 1987年.
- 20) 新村 出編：広辞苑, 岩波出版, 2017年.
- 21) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale : 前掲書1), p3.
- 22) Florence Nightingale (1860) : 前掲書2)
- 23) Florence Nightingale (1860) : 前掲書2), p142.
- 24) 佐々木秀美著：『ナイチンゲールの宗教観に関する若干の考察ー友人アーサー・ヒュー・クラブとの関わりをてがかりにー (その1), 総合看護 Vol 40, No 3, pp41-48, 2005年.
- 25) 佐々木秀美著：『ナイチンゲールの宗教観に関する若干の考察ー友人アーサー・ヒュー・クラブとの関わりをてがかりにー (その2), 総合看護 Vol 40, No 4, pp73-80, 2005年.
- 26) Florence Nightingale (1860) : 前掲書2), p142.
- 27) Florence Nightingale (1860) : 前掲書2), p142.
- 28) 塩川徹也訳：パンセ, (上), p380, 岩波書店, 2015年.
- 29) 日本聖書協会：前掲書19), pp229-272.
- 30) 日本聖書協会：前掲書19) 新, p229.
- 31) 日本聖書協会：前掲書19) 新, p229.
- 32) 日本聖書協会：前掲書19) 新, p230.
- 33) Wikipedia<https://ja.wikipedia.org/wiki/>

- 34) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale : 前掲書 1 ), p5.
- 35) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale : 前掲書 1 ), p6.
- 36) 中野好之著 : ションソン博士の言葉, みすず書房, 2002年.
- 37) 中野好之著 : 前掲書36)
- 38) Wikipedia<https://en.wikipedia.org>.
- 39) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale : 前掲書 1 ), p6.
- 40) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale : 前掲書 1 ), p8.
- 41) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale : 前掲書 1 ), p14.
- 42) 大槻晴彦訳, 編集 : 世界の名著32 人性論, p411, 中央公論社, 1996年.
- 43) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale : 前掲書 1 ), p14.
- 44) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale : 前掲書 1 ), pp14-15.
- 45) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale : 前掲書 1 ), p14.
- 46) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale : 前掲書 1 ), p11.
- 47) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale : 前掲書 1 ), p22.
- 48) 佐々木秀美著 : ナイチンゲール, 神の僕となり行動する, ナイチンゲールの宗教観—神秘主義の影響とアーサー・ヒュー・クラフとのかかわりを手がかりに—, pp59-88, 日本看護協会出版会, 2021年.
- 49) 森松健介, 中央大学人文科学研究所編 : 喪失と覚醒19世紀後半から20世紀への英文学, p232, 中央大学人文科学研究所研究叢書, 中央大学出版部, 2001.
- 50) Florence Nightingale : 前掲書 2 ), p167.
- 51) Florence Nightingale (1860) : 前掲書 2 ), p187.
- 52) Florence Nightingale (1860) : 前掲書 2 ), p187.
- 53) 佐々木秀美著 : フローレンス・ナイチンゲールその神秘主義的思想, 看護学統合研究, Vol. 21, No. 1, pp9-24, 2019年.
- 54) Florence Nightingale (1860) : 前掲書 2 ), p192.
- 55) 五島茂, 坂本慶一編 : 世界の名著42 オウエン／サン・シモン／フーリエ, p109, 中央公論社, 1996年.
- 56) Robert Owen (1857), The Life of Robert Owen, (五島茂訳 : オウエン自叙伝, p377, 1995年.)
- 57) 佐々木秀美著 : ナイチンゲールとミルとの論争—ヒューの論文を手がかりに—, 総合看護, Vol. 37, No. 3, pp53-64, 2002年.
- 58) 清水幾太郎編 : 世界の名著46 コント, 『社会静学と社会動学』, p256, 中央公論社, 1995年.
- 59) Florence Nightingale (1888) : 前掲書 4 ), p176.
- 60) Florence Nightingale (1860) : 前掲書 2 ), p192.
- 61) Florence Nightingale (1860) : 前掲書 2 ), p193.
- 62) William Shakespeare (1607), 福田恒存訳 : アントニーとクレオパトラ, 新潮社, 2010年.
- 63) William Shakespeare (1599), 福田恒存訳 : ジュリアス・シーザー, 新潮社, 2013年.
- 64) William Shakespeare (1607) : 前掲書61), p98.
- 65) パスカル著, 塩川徹也訳 : パンセ (中), p43, 岩波文庫, 2020年.
- 66) パスカル著, 塩川徹也訳 : 前掲書64), p44.
- 67) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale : 前掲書 1 ), p139.
- 68) 呉茂一著 : ギリシャ神話上・下, 新調社, 1992年.
- 69) Florence Nightingale (1860) : 前掲書 2 ), p205.
- 70) プラトン著 (紀元前375年頃), 藤沢令夫訳 : 国家下, p112, 岩波文庫
- 71) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale : 前掲書 1 ), p23.
- 72) Florence Nightingale (1860) : 前掲書 2 ), p166.
- 73) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale : 前掲書 1 ), pp214-215.

- 74) 塩川徹也訳:前掲書28)
- 75) 塩川徹也訳:前掲書28), p134.
- 76) 塩川徹也訳:前掲書28), pp257-258.
- 77) Wikipedia, MEMOIRS OF Sr. ISAAC NEWTONS life より.
- 78) Florence Nightingale (1860):前掲書2), p205.
- 79) Florence Nightingale (1860):前掲書2), p216.
- 80) Florence Nightingale (1860):前掲書2), p222.
- 81) Florence Nightingale (1860):前掲書2), p226.
- 82) メアリ・ウルストンクラフト著, 白井堯子他訳:女性の権利の擁護, 未来社, 1993年.
- 83) Florence Nightingale (1860):前掲書2), p227.
- 84) Florence Nightingale (1851): The Institution of Kaiserswerth on the Rhine for the Practical Training of Deaconesses, under the Direction of the Rev, (湯槇ます他訳:ナイチンゲール著作集第一巻, カイゼルスウェルト学園によせて, 現代社, 1983年.)
- 85) Florence Nightingale (1851):前掲書83), p3.
- 86) 佐々木秀美著:ナイチンゲールの組織管理論—他者をコントロールするにはまず, 己をコントロールせよ—, 看護学統合研究 Vol. 16, No.2, pp 1-21, 2015年.
- 87) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale:前掲書1), p228.
- 88) Florence Nightingale (1858): Subsidiary Notes as to the Introduction of Female Nursing into Military Hospitals, (湯槇ます他訳:ナイチンゲール著作集第一巻, 女性による陸軍病院の看護, 現代社, 1985年.)
- 89) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale:前掲書1), p11.
- 90) 佐々木秀美著:ナイチンゲール—イギリス陸軍を改革する—学習(経験)したことから学習せよ, 看護学統合研究 Vol.13, No. 1, pp29-48, 2011年.
- 91) Florence Nightingale (1888):前掲書4), p365.
- 92) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale:前掲書1), p2.
- 93) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale:前掲書1), p2.
- 94) Sir Edward T.Cook:前掲書5), p328.
- 95) イマヌエル・スウェーデンボルグ著, 柳瀬芳意訳:天界と地獄, 静思社, 1998年.
- 96) イマヌエル・スウェーデンボルグ著, 柳瀬芳意訳:結婚愛, 静思社, 1991年.
- 97) Sir Edward T.Cook:前掲書5), p75.
- 98) 塩川徹也訳:前掲書28), p184.
- 99) Litton Strachey:前掲書3)
- 100) マシュー・アーノルド著, 石田憲次訳:文学とキリスト教義—聖書のより良き理解のための試練—, p326, あぼろん社, 1982年.
- 101) マシュー・アーノルド著, 石田憲次訳:前掲書99), p326.
- 102) Cecil Woodham-Smith (1950):前掲書6), p292.
- 103) Cecil Woodham-Smith (1950):前掲書6), p294.
- 104) Florence Nightingale (1860):前掲書2), pp200-201.
- 105) Florence Nightingale (1860):前掲書2), p166.
- 106) Florence Nightingale (1860):前掲書2), 156.
- 107) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale:前掲書1), pp14-15.
- 108) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale:前掲書1), p164.
- 109) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale:前掲書1), pp167-168.
- 110) キルケゴール著, 芳賀檀訳:愛について, p108, 新潮文庫, 1952年.
- 111) キルケゴール著, 芳賀檀訳:前掲書109), p225.